

# 国民文学論の理路と隘路

——天皇制をめぐる言葉——

内藤 由直

## 一 言葉の連続性

竹内好が編集した論集である『国民文学と言語』（河出書房 一九五四）に、中野重治の「かなしい遺産」（初出『言語生活』一九五三・九）が収録されている。中野はこのエッセイの中で、「戦争がまだすんでいないのだ。「戦時」そのものが生きているのだ」と書いている。中野がこう書いた時点では、もちろん日本の敗北により戦闘は終結しており、約七年間の占領下で戦争処理を終えた日本は、独立を回復し戦争状態から脱している。では、中野は、何を以て戦時そのものが生きていっているのか。

中野は、「戦時」の連続性を「言葉」の連続性として捉える観点から、戦時体制が今も継続されていると認識する。中野によれば、戦中の言語使用の様態と戦後のそれには変化がない。具体例として、「お話をきかせて頂きました」・「申しのべさせていたただきたいと思っております。」等々の、行為する責任の所在を自分から相手の側へすり替えようとするレトリックが、旧態依然として残っていることを中野は挙げている。つまり、丸山真男の言う、主体的責任意識を欠いた「無責任の体系」（『軍国支配者の精神形態』『潮流』一九四九・五）が、そのまま戦後にも残存しており、その証左が言葉に現れているというわけである。

「言葉」（＝戦時）の連続性を指摘する中野が、なかでも深刻な問題

として考えていたのが、こうした戦時体制下の言葉を、「民主陣営の人々が、われわれがそれを受けついでいる」（『かなしい遺産』前掲）ことであつた。言葉に変化がなければ、言葉によって掴まれる生活を以前と変わらぬやり方で捉えることを結果する。例えば、いくら民主的組織の中で討論・議論をしようとも、「生活の民主化ということが、生活の天下一民主化という線をつかまれ」ることになると中野は言う。中野は、「戦争はすんだが、その後の、面目一新したはずの日本生活をつかむのに、われわれは、近衛・東条——さらに明治にさかのぼる——にゆがめられた政治的方言でつかんできた点がすくなくない、多い、非常に多い、というこの点が第一の問題だ」と述べている。

中野は、自身を含めた日本人が戦時の言葉を清算していない、換言すれば、戦時体制下の抑圧構造を未だに解消していないと考える。したがって、過去の言葉に抗うことこそが、以前と変わらぬ政治的圧迫に抵抗する力となり、そして、継続された戦争を終結させることとなる。しかし、この作業は容易なものではない。中野は、「わたしは、こういう圧迫をはねのけようとする。この仕事には言葉が要る。言葉なしには、この仕事はやれもせず、やりぬけもしない。ところで、その目的でわたしの使おうとする言葉は、実は当の相手のつくっておいたものだ」とも述べている。抵抗するため自ら用いる言葉は、その多くがそもそも相手によって予め作られていた言葉であり、そのことによって自己を圧迫

する相手に対する抵抗が、相手を叩き伏せる前に解除されてしまうのだ。

このような中野の自己言及的な問題意識に竹内が注目したのは、それが竹内自身の考えにそのまま重なるからであり、そして、竹内が提唱した国民文学論の批評意識に結節するからである。中野に先立って竹内は、「人は、自分が何を考え、いかに感じるかを、自分の尺度であらわすことができない。逆に、既成の表現のワクにはめてからでない、自分が何を考え、いかに感じてゐるかを判断することができない。(中略)すでに表現は与えられてゐる。その規則にはめて生活をいとなむことを強制されているのだ」(『美文意識について』『文芸』一九五一・七)と述べている。ここから竹内は、鬱屈した日本人の表現を解放することこそが文学者の責務であり、同時に国民文学論の課題であると主張する。だが、中野が述べていたように、これは非常に困難な課題であった。

本稿が以下に論じようとするのは、戦後国民文学論が自らに内在する言葉を問いつながら、遂にその言葉の強度から離脱できなかった問題である。このことは、言い換えれば、当該議論が何を批判し、そして、何が批判できなかつたのかを明らかにすることである。では、国民文学論が批判の対象としたものは何であつたのか。

## 二 プロレタリア文学運動批判の論理

国民文学論を構成する主要な論理機制の一つは、先行するプロレタリア文学運動に対する批判である。竹内は、「文学の創造の根元によこたわる暗いひろがり、隈なく照らし出すためには、ただ一つの照明だけでは不十分であろう。その不十分さを無視したところに、日本のプロレタリア文学の失敗があつた」(『近代主義と民族の問題』『文学』一九五一・

九)と述べ、階級という一つの照明に固執した結果、民族・国民という全体性を等閑視した過去のプロレタリア文学運動を批判している。また、小田切秀雄も、一九三〇年代のプロレタリア文学運動が共産主義文学確立への志向性を先鋭化させていった結果、「日本近代文学が実現しえなかつた国民文学的な規模はついにプロレタリア文学によつても実現されなかつた」(『頽廢の根源について』『思想』一九五三・九)と、竹内同様に当時の運動の在り方を批判している。

竹内と小田切は、プロレタリア文学運動の失敗を、国民文学確立の失敗として捉えている。ではなぜ、プロレタリア文学運動は、国民文学を確立しなければならなかつたのか。この理由を明らかにするために、まずはプロレタリア文学運動がどのようにして国民文学確立に失敗したのかを考察する必要がある。

竹内は、プロレタリア文学運動が国民文学確立に失敗した原因を、階級の万能化に求めた。プロレタリア文学運動が導入した階級概念は、その初期には社会の動態を認識するために必要な抽象化であつたが、しかし、運動が急進化し、一つの照明に過ぎなかつた階級概念が当為として実体化・普遍化してゆくにつれて、それは現実との関係性を失つていった。そして、プロレタリア文学運動は、そうした現実との乖離を修正することなく、階級という部分を所与とすることで、民族・国民という全体を置き去りにしたのだと竹内は考える。この錯誤の根本原因を、竹内は、日本近代文学に通底する「近代主義」及びそれによつて歪められた「自我」の問題として顕在化しようとした。

竹内は、プロレタリア文学に限らず、これまでの文芸評論がおしなべてヨーロッパ近代文学との相関関係でのみ日本文学の価値判断を行っている現状を指摘し、これを「日本文学の自己主張を捨てている態度」(『近代主義と民族の問題』前掲)と捉え、この思考様式を「近代主義」と

呼んだ。そして、これを「民族を思考の通路に含まぬ、あるいは排除する、ということだ」と定義する。この近代主義は、日本文学において支配的傾向であるというのが竹内の判断であるが、しかし、それは日本に近代文学が発生した時に生じたものではないという。竹内によれば、近代主義の発生は、「だいたい「白樺」による抽象的自由人の設定の可能性が開けて以後」のことである。「特に白樺以後、人間を普遍的な形で捉えるという方法が支配的になってから、抽象された、民族性を持たない人間がいつも念頭に来る。(中略)狭い隔離された自分という世界の中の自我の確立、それは自我意識の確立といってもいいが、それが出て来る元は、やはり歴史的に言えば白樺の末期じゃないかと思えます」(対談「文学運動のエネルギーを求めて」『日本読書新聞』一九五三・十一・二)

と竹内は述べている。白樺派の作家たちは、自己の主体をヨーロッパとの同時代関係の中で把握する視点を獲得することで、自らを普遍的な人類として認識したが、しかし、そのことによって自我に刻印された民族性を捨象し、不完全な自我意識を確立したと竹内は考えるのである。

こうした白樺派の自我意識は近代主義をそのまま受け継いだことが、当時のプロレタリア文学運動最大の失敗であったと竹内は言う。「白樺」の延長から出てきた日本のプロレタリア文学は、階級という新しい要素を輸入することには成功したが、抑圧された民族を救い出すことは念頭になかった。むしろ、民族を抑圧するために階級を利用し、階級を万能化した。抽象的自由人から出発し、それに階級闘争説をあてはめれば、当然そうならざるを得ない」(「近代主義と民族の問題」前掲)と竹内は述べている。プロレタリア文学の作家たちも、インターナショナルリズムという世界との同時代性を獲得し、自らを特権化された存在(前衛)として同定することで、自己が拠って立つ足場を見失い、日本人としての自我確立を等閑視したと考えられたのである。

竹内は、プロレタリア文学運動の軌となった近代主義を超克するために、自我意識を民族・国民という全体性の内部から生成してゆかなければならないと主張する。しかし、これは一見矛盾した考えに思われる。なぜなら、敗戦後の文学思潮において、自我確立と民族・国民意識とは、対抗概念として抗争の関係の中で把握されていたからである。

例えば、荒正人による「エゴイズム」(『第二の青春』『近代文学』一九四六・二)の称揚や、平野謙の「個人主義文学」の確立」(『政治と文学』『新潮』一九四六・十)といった主張によって、民族・国民と自我の関係は、全体主義と個人主義の対立関係として捉えられていた。そこには、戦争の記憶というバイアスが大きく影響していたのだが、ここから自我確立とは、日本では実現し得なかつた西洋的自我の確立という認識が一般化していた。だが、竹内によれば、こうした認識は、プロレタリア文学運動が犯した誤謬の反復である。「個人の解放と国民(民族といつてもいい)意識の発生とは、多くの場合に同時である」(『国民文学の問題点』『改造』一九五二・八)と述べているように、竹内は、個人意識と全体、即ち自我確立と民族・国民の意識とは矛盾しないと考えている。自我確立は、近代国民国家確立の必要条件なのである。そして、日本の自我の確立と日本国家の確立を同時に表現するものこそが、国民文学として考えられたのである。

このように、竹内によるプロレタリア文学運動批判の要諦は、それが世界性を注視する余り、日本という現場を捨象したという点にあった。そして、そのことにより、プロレタリア文学運動は、日本人の自我を、その自我が存立する現場・現実即ちした形で活写することができず、国民文学の確立に失敗したというのである。しかし、このような批判は、単なる認識論的布置の問題にとどまるものではない。なぜなら、プロレタリア文学運動において、認識とは、革命の戦略に結節してゆくから

だ。

竹内は、プロレタリア文学が日本という現実の場を活写すれば事足りると考えていたわけではない。たとえプロレタリア文学運動が、近代主義的認識を乗り越え、日本の現実及び日本の自我を忠実に表現し得たとしても、そこに国民文学が直ぐさま確立されるわけではないのである。

竹内は、「近代主義は、前近代的社会、つまり身分制が解放されていない社会に、近代が外から持ちこまれた場合に発生する意識現象である」(「国民文学の問題点」前掲)とも述べている。竹内のこの文言に織り込まれているのは、近代化の不徹底が近代主義を生じさせるという認識である。ゆえに、近代主義を乗り越えるためには、近代化を達成しなければならぬのだ。なぜなら、竹内の考えでは、中世的封建関係から脱却した近代的市民を国民化することが革命のプロセスにおける最初段階として不可欠なものである。そして、その近代化の達成度を測る文化的指標が国民文学の存在なのである。「文学が近代化されるということ」は、要するに国民文学が成立することだ(座談会「国民文学の方向」『群像』一九五二・八)と竹内が言っているのはその意味である。しかし、日本において「国民文学は、そのものとして存在しないし、イメージをえがくことさえも、十分にはこころみられていない」(「国民文学の問題点」前掲)。これはつまり、日本では近代化が未完であるということである。そして、この認識枠組みをプロレタリア文学運動批判の文脈に戻せば、それは、プロレタリア文学運動が三二年テーゼに基づくブルジョア革命を遂行できなかったということを意味する。

コミンテルンから日本共産党に与えられた三二年テーゼは、「今日の日本の条件の下にあつては、プロレタリアートの×裁<sup>独</sup>へは、たゞブルジョア民主主義革命<sup>命</sup>の道によつてのみ、即ち、〇〇<sup>天皇</sup>制を打倒し、地主を収<sup>奪</sup>し、プロレタリアート農民の独<sup>裁</sup>を樹立する道によつてのみ到達し

#### 四

得る」(「日本の情勢と〇〇<sup>日本共産</sup>×党の任務に関するテーゼ」『インタナショナル』一九三二・九)<sup>①</sup>と、プロレタリア革命の前段階として、ブルジョア革命の必要を強調する。この三二年テーゼが示す二段階革命を遂行するために、プロレタリア文学運動は、まずブルジョア革命(「近代化」)の指標である国民文学の確立を目指し、その次に共産主義文学確立の方向へと向かわなければならないはずである。小田切は、「一般に文学が近代的な国民の形成期に豊富な人民性をもって現われた場合に、これを国民文学というわけです。ところが日本の場合にはそうならなかった。プロレタリア文学は本来ならこの制約を克服して、国民文学的な規模を人民的に打立てるといふ努力の中心に立たねばならなかった」(「文学運動のエネルギーを求めて」前掲)と述べている。しかし、当時の運動は、その方向へは向かわなかった。小田切は、この事情を次のように説明している。

すでにブルジョア革命が完了していてブルジョアジーが支配権力を握っているなら革命はプロレタリア革命となり、絶対主義が権力を握りブルジョアジーや地主がこれに結びついていながら革命はブルジョア民主主義革命となる。後者の場合、プロレタリアートは絶対主義の基礎としての封建的土地関係に苦しむ農民をはじめとして民主主義的解放をもとめる一切の人民勢力と結びつきつつ広汎な戦線をつくつてたたかわねばならぬ。日本の現実がこの後者に属することはさらに三二年テーゼによって一層明確にされたが、このような日本の現実に根ざさぬプロレタリア革命論は、日本の革命運動のなかに長く生き続け、階級闘争の展望を公式的にブルジョアジーとプロレタリアートの闘争に集中した。

(「頽廢の根源について」前掲)

当時の指導者であった蔵原惟人による、「プロレタリア・レアリズム

への道」(『戦旗』一九二八・五)から「ナップ」芸術家の新しい任務」(『戦旗』一九三〇・四)を経て、「芸術的方法についての感想」(『ナップ』一九三二・九・十)に至るプロレタリア文学運動理論の展開は、前衛の眼で世界を見ることを共産主義芸術の確立に集約させ、唯物弁証法的創作方法を無謬の前提と化すものであった。小田切によれば、この蔵原理論がプロレタリア文学運動を指導し続けた結果、「文学運動を観念的なラジカリズムに向わせることになり、弾圧が強化されたときに組織的にも人間的にも破壊されやすい素地をつくることになった」(『頽廢の根源について』前掲)のである。

では、プロレタリア文学運動は、なぜ日本の現実に基づかない革命論を実行したのか。小田切は、「ブルジョア民主主義革命が戦略目標としてかかげられねばならなかった絶対主義社会のなかで、革命的プロレタリアートのみの共産主義文学運動の展開が試みられたことは、プロレタリア文学の理論と運動とに移植観念的性格を濃厚ならしめないではいかなかった。すでにブルジョア民主主義革命を経過してブルジョアジーが支配している国々でのプロレタリア運動の方式が、ともすればそのままの形で日本の革命運動のなかに移植されていたような事情はプロレタリア文学運動のなかにも根強く生きていたのである」(『国民文学論の到達点と問題点』『マルクス・レーニン主義研究』一九五四・五)と述べ、ラップ(ロシア・プロレタリア作家同盟)理論及び、ラップが中心となったハリコフ会議決定(「日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山の報告に対する決議」『ナップ』一九三二・二)をそのまま日本に移植したことが、蔵原理論のような急進性を生じさせた原因だったと考える。

以上のように、竹内と小田切の国民文学論に共通するのは、いずれもプロレタリア文学運動の狭隘な視野と非現実性に対する批判であり、それらの事象に看取し得るブルジョア革命Ⅱ近代化の不徹底を剔抉するこ

とであった。したがって、革命の第一段階としての近代化を完遂する必  
要から、プロレタリア文学運動は、国民文学を確立しなければならな  
かったと考えられたのである。では、近代化を徹底するとはどういうこと  
なのか。この問題を検討するためには、次に戦中と戦後の二つの国民文  
学論における差異と反復を考察しなければならない。

### 三 戦中・戦後の差異と反復

一九三〇年代の戦時下に展開された国民文学論を特徴付けるのは、戦  
後の議論と同様に、先行するプロレタリア文学運動への批判的言明とし  
て提起されたことである。浅野晃は、「これから我々が問題とする国民  
文学ちうのは、つまり或る意味で出直したプロレタリア文学ちうやうな  
ものとして、結局僕は実現されると思ふ」(雑談会「国民文学的遺産の問  
題」『麵麴』一九三七・四)と述べている。高倉テルも、「国民文学の確立  
とゆう現象なくしてプロレタリア文学の発展とゆう事わ、原則的にあり  
得ない」(『日本国民文学の確立(下)』『思想』一九三六・九)と述べ、国民  
文学確立を経ずして展開されたプロレタリア文学運動の歪みを批判す  
る。

戦後の国民文学論は、国民文学確立に失敗したプロレタリア文学運動  
の誤謬を白樺派という発生要因に遡ることで批判したが、一九三〇年代  
の文脈においても、例えば、赤木俊(荒正人)が、国民と文学を隔てる  
溝を前に白樺派は「観念と空想に依つて飛翔を試みた」(『国民文学の課  
題』『日本学芸新聞』一九四一・一・十)と述べており、また中谷孝雄が、  
『白樺』の運動なんかね、あれなんか結局一種の貴族社会みたいなど  
ころから起つて来てるだらう。しかしプロレタリアの運動にしてもイン  
テリゲンチヤの運動だ」(『国民文学的遺産の問題』前掲)と述べるように、

白樺派とプロレタリア文学運動に共通した観念性・特権性が批判されている。加えて、青野季吉が、「この国のプロレタリア文学者は、ソヴィエットに対する在来の「敬意」と「信頼」をいちどつき離して、それを一つの大きな実験として、改めて見直すところから出発しなければならぬ」（『不振のプロレタリア文学と其課題』『中央公論』一九三七・三）と述べ、貴司山治がプロレタリア文学運動における「ラップ的偏向」（『進歩的文学者の共働について』『行動』一九三五・六）を指摘したように、プロレタリア文学運動の移植観念的性格も戦後同様に批判されていた。

戦後の議論において、白樺派からプロレタリア文学運動へ連続する観念性・特権性を批判する言明に織り込まれていたのが日本におけるブルジョア革命の不徹底であったことは先に見た通りだが、一九三〇年代の議論における説明図式も、これとほぼ同様の認識を示している。例えば、浅野は、「国民文学ちゆうのは何か、ちゆううことになるんですけれども、それはつまり普通の文学史からいふとブルジョア革命の段階に発展し確立してゆく」（雑誌会「国民文学の要望」『麵麴』一九三七・三）と考へ、国民文学不在の「日本はブルジョア革命を通つたんだが文化の方面は遅れてゐる」と述べている。高倉も同じように、「明治維新の変革わ、産業革命の要素お殆んど持つことができなかったか、或わ、持つてもほんの僅かに過ぎなかった。その結果わ、資本主義形態お具えた日本の社会に封建的な要素お非常に深く残存させた。それが為に、封建的身分層わそれから以後も長く日本の社会から消えることがなかった。日本国民文学確立のための最大の障害となつたものが、実にこの封建的身分層であつた」（『日本国民文学の確立（下）』前掲）と言う。プロレタリア文学運動は、こうした情勢を等閑視したところに成立したものだつたと考えられたのである。戦後国民文学論は、このような戦時下の説明図式をそのまま反復しているのだ。では、戦中と戦後の差異はどこにあるのか。

戦中・戦後の国民文学論は共に、ブルジョア革命を経た上で、近代化（市民社会化）の指標となる国民文学を確立し、そして、その次にプロレタリア文学を形成してゆかなければならないという考えで一致している。しかし、国民文学確立条件の存否をめぐって、戦中と戦後の議論は対立する。

戦後の議論では、特に竹内の論に顕著だが、国民文学確立の条件が、国民文学論を主張する現時点で存在しないという認識が基底にある。竹内は、「国民文学は、特定の文学様式やジャンルを指すのでなく、国の全体としての文学の存在形態を指す。しかも歴史的範疇である。デモクラシイと同様、実現を旨ざすべき目標であつて、しかも完全な市民社会と同様、実現の困難な状態である。それに到達することを理想として努力すべき日々の実践課題だ。既成のモデルで間にあうものは何もない」（『国民文学の問題点』前掲）と述べている。つまり、国民文学論は運動理論そのものなのであり、竹内は、国民文学確立の条件から構築してゆかなければならないと考へている。これに対して、戦中の議論では、国民文学は今すぐに確立すべき様式である。浅野は、「日本で、すでにブルジョア革命は早く完成されたのに、何故いま、で国民文学の確立が妨げられてゐたのか（中略）封建的身分層の残存はすでない。そして国民がある。だから国民文学がなければならぬ」（『国民文学論出でよ』『新評論』一九三七・三）と述べており、高倉も、「日本の社会に大きく残存した奇怪な封建的身分層の要素わ、ここまで来て、初めてほとんど振り落されてしまつたとゆう事実」（『日本国民文学の確立（上）』『思想』一九三六・八）を、大衆文学の興隆による広汎な読者編成の中に看取する。浅野と高倉の認識では、日本においてブルジョア革命は既に成立しており、ゆえに国民文学確立の十分条件は現前に存在するというわけである。では、ブルジョア革命最大の障壁である「半封建的な日本社会のシンボ

ルとしての天皇制」(座談会「文学者の責務」『人間』一九四六・四)は、どのように考えられたのか。

戦中の議論が天皇制の問題を回避するために行ったのは、史的唯物論の転倒である。マルクス・エンゲルスは、「ブルジョアジー即ち資本家が発達すれば、それと同じ比例を以つて、プロレタリア即ち近代の労働者階級が発達する」(『共産党宣言』『外事警察研究資料第十三輯』内務省警保局 一九二五)と述べ、ブルジョア革命が封建的身分制度を一掃し、間もなくブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立を単なるものであると考えているが、浅野は、これを逆手に取り階級対立を単なる表徴としてのみ捉えようとする。浅野は、「階級の対立が出たと云ふことが身分層の区別が解消したと云ふこと、人民がすべて同じ市民として国民になつたと云ふことなのだ」(『国民文学論出でよ』前掲)と述べている。浅野の論理を敷衍すれば、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立を主な主題としたプロレタリア文学運動の存在それ自体が、既にブルジョア革命を完遂したことの証明となる。したがって、天皇制の存在は考慮する必要がなくなるのだ。

あわせて、国民文学論に先行して、有用な論理の雛型が存在したことも、天皇制を回避することに役立つ。佐野学・鍋山貞親は、次のように述べている。

日本の皇室の連綿たる歴史的存在は、日本民族の過去における独立不覇の順当の発展——世界に類例少きそれを事物的に表現するものであつて、皇室を民族的統一の中心と感ずる社会的感情が勤労者大衆の胸底にある。我々はこの感実を有りの儘に把握する必要がある。更に日本の君主制が旧ロシアのツァール、旧ドイツのカイゼル等と異り、明治維新以来、進歩の先頭に立つた事實は、ブルジョアジーの間でもプロレタリアートの間でも、反君主闘争を現実的問題

たらしめなかつた。

(『共同被告同志に告ぐる書』『改造』一九三三・七)

ここには天皇制を封建遺制と捉える視点は無い。むしろ、天皇が近代日本における改革の中心的存在と化しており、統一された民族の象徴として機能している。そして、ここで言われている民族とは「多数者即ち勤労者」である。つまり、プロレタリアートを代表するのは、もはや共産党ではなく天皇なのだ。

佐野はまた、言語・領土・文化の共通性と並んで統一な経済的連繫を、民族定義の基礎概念として設定したスターリンの民族論<sup>⑧</sup>を敷衍して、「民族的統一は種々の歴史的理由に基き殊に近代では資本主義生産方法の結果として成立した」(『民族と階級』『改造』一九三四・五)と述べ、さらに「発達した民族は独立の国家を形成して生活する、かゝる民族のみが国民と呼ばれ得る」と言っている。国民の成立に先立って、民族というア・プリオリな基層が存在し、それが資本主義によって統一され表面に浮上するだけだと言っているのである。要するに、ブルジョア革命は、封建制解体の契機ではない。それは、単に資本主義が導入された歴史の一点に過ぎないものとして認識され、社会革命の契機は、天皇・天皇制の存在とともに後景へと退いてゆくのである。

そして、こうした認識は、国民文学論でそのまま採用されることになる。浅野は、次のように述べている。

国民文学と云ふものは、近代の統一国家とひとしく資本主義の産物だと云つてもよい。資本主義が国民を形成した。スターリンなどの民族論で、民族の形成過程は資本主義の発展過程に他ならないと云ふように云ふのは此の点に着点して云つてゐるのである。しかし、云ふまでもなく民族と云ふものが資本主義によつてはじめて作られたもので、その前には無かつた、つまり無からの創造であると云ふ

のではない。民族はそれ自体としては長年月の歴史の産物なのである。それが国民としてはじめて統一な表現を獲得するに至つたのがブルジョア革命に於いてであつたと云ふまでのことである。だから国民の血肉を形作り作つてゐるものはむろん祖先以来の伝統的なものなのであつて、それが従来は相互に分裂した身分層の特殊な表現の下にしか表現されてゐなかつたものが、国民の完成と共に一つの統一な民族的表現が可能となつたと云ふことなのである。文学の方面に於いてもさうなので、国民文学の成立によつて、民族の統一な文学的表現がはじめて得られたので、その意味では民族的なものには国民文学の中ではじめて完全な表現を見出したと云ふことが出来る。

（「国民文学論出でよ」前掲）

封建制廃止というブルジョア革命の核心を迂回し、「伝統」という別種の評価軸を導入することで、天皇制の問題は、戦中の国民文学論に於いて何の障害ともならなかつた。こうした論理操作によつて、天皇制とブルジョア革命は、何の矛盾もなく共存し得るものと考えられたのである。

しかし、天皇の存在は単に不問に附されただけではない。それは、祖先以来の伝統的なものの具体的存在として国民文学論の中に組み込まれる。例えば、亀井勝一郎は、国民文学を「民族の英雄を祭る文学である」（『英雄主義と文学』『新潮』一九三三・六）と定義し、「わが国に例をとるならば、古事記や万葉集のあるものは最も見事な英雄讃歌である。そして最大の英雄とはわが国では天皇御自身に他ならなかつた」と述べている。浅野も、プロレタリア文学運動批判としての国民文学論から後退し、「われわれの言ふ国民文学は、国民の再形成のために絶対に必要な国民的」臣民的感觉の回復のための戦ひでなければならぬ。そこで、この戦

ひに於いて、われわれは拠るべき源理を、古典を確立しておかねばならぬ。理想主義文学は、われわれの国では肇国の精神を根元とするから、その古典は、歴史すなはち日本書紀であらねばならぬ。ロマンチズム文学は英雄をうたふものであるから、その古典は叙事詩Ⅱ古事記であらねばならぬ。そして抒情詩の古典は、万葉であるだらう。かく古典を確定する時、国民文学の伝統は脈々としてわれわれに伝承される」（『国民文学への道』『新潮』一九四〇・十一）と述べるようになる。こうして古典が前景化されるのは、それらが天皇を表象しているという要因とともに、「コトバは民族の血」（タカクラ・テル『ニッポン語』北原出版 一九四四）であるという認識が根底にあるからだ。血脈としての言語的連続性と皇統の連続性は、共に想像的であることによつて同質である。伝統を担保する具体として天皇の存在を取り入れることによつて、戦中の国民文学論は、もはや革命の論理ではなく単なる系譜探しになつてしまふのである。

このように、一九三〇年代の国民文学論は、天皇制問題を回避した不完全な近代化論であつた。戦後の国民文学論が、これら戦中の議論を踏まえた批判的言明として提起されたことは、「たとい「国民文学」というコトバがひとたび汚されたとしても、今日、私たちは国民文学への念願を捨てるわけにいかない」（『近代主義と民族の問題』前掲）という竹内の言葉から明らかである。竹内は、汚れとしての天皇制を払拭するため、近代化を徹底しなければならぬと考えたのだ。では、戦後国民文学論において、天皇制の問題はどのように扱われたのか。

#### 四 戦後国民文学論と天皇制の問題

敗戦後、天皇制の問題をいち早く議論したのは、『近代文学』同人によ

る座談会「文学者の責務」（前掲）であった。この座談会では、主に荒正人によって、天皇制廃止を経ずしてブルジョア革命は完遂しないということが強調されている。荒は、「半封建的な日本社会のシンボルとしての天皇制がある限りは、近代的人間といふものは確立され得ないと僕は断言するね。政治的な言葉でいへば、民主主義革命が完成しないと「ふことさ」と述べている。しかし、天皇制の問題は、政治的問題にとどまるものではない。天皇制の問題を解決するためには、自己の内部に残存する天皇制をまず解体しなければならぬと考えられた。小田切は、次のように述べている。

天皇制は国民感情だといはれてゐるが、国民感情といふのは実はわれわれ自身もそれを知らないうちに持つてゐるといふことだ。天皇制下につくられて来た国民感情といふものが非常に封建的なものであることはいふまでもないが、さういふ封建制はわれわれ日常の色々な感覚の隅々にまで色々な形で入り込んで来てゐる。だからさういふものとの戦ひ、自分自身の中にある封建制、日本人の中に広く浸潤してゐる封建制、それとの戦ひといふものが非常に必要なことになつてゐる。

小田切のこの発言に、「どうも僕にはピンと来ないね」と疑問を呈する平野謙に対して、荒は「天皇制は自分にとつて、あつたはうがいいか、ないはうがいいか、いま痛烈に感じなければならぬ。共産党が出してゐるあゝいつた政治的な問題としてでなしに、文学者のな問題、——生活感覚、感情、意欲、さういふ問題として天皇制をこんち全面的に文学者が問題にしなればいけない」と述べる。ここから荒は、内面化された天皇制を解体するために、近代的自我の確立を強硬に主張する。そして、「それはヨオロッパ的な個人主義であつていい」とされた。

竹内の国民文学論は、文学における天皇制というこの座談会の問題を

継承しながらも、その問題解決の方法において差異化を図ろうとしていた。「戦後『近代文学』がやったような、日本は前近代的な社会である、文学もそうだが、だからもう一度近代化して行かなければならない、これはいいのだが、その近代化の方向をヨーロッパをモデルにした過去とおなじやり方で、果して今日の日本の近代化ができるかどうかということに疑問を持った」（『文学運動のエネルギーを求めて』前掲）と竹内は述べている。竹内の考えでは、荒のような主張は近代主義であり、これでは個人が抽象化され、日本の現実が看過されてしまう。竹内は、日本の現実に直接対峙し、「ウルトラ・ナシヨナリズムの中から真実のナシヨナリズムを引き出してくること」（『ナシヨナリズムと社会革命』『人間』一九五一・七）で、天皇制に回収されない「正しいナシヨナリズム」を確立する必要があると強調する。では、具体的にどうするのか。

竹内は、「『近代文学』一派が、国民文学という形で問題をとらえ得なかつたのは、（中略）文壇文学だけを対象にして、その内部の前近代性を指摘するに止まつたからである。こうすると、解決の方向は、自我の確立、近代的市民への解放、というだけしか出てこない。それ以上の国民的連帯へまでは発展しない」（『国民文学の問題点』前掲）と述べている。竹内にとつて肝要なことは、正しいナシヨナリズムを確立するための国民的連帯を如何にして組織化してゆくかということであつた。この組織論的視点は、荒のような自我確立論者が持ち得なかつた観点である。「暗い谷間」に陥れられたルサンチマンを論拠とする『近代文学』派の思考は、樂觀的な自己の絶対化に帰結し、例えば荒のように、「民衆とはたれか。わたくし以外に民衆はない」（『民衆とはたれか』『近代文学』一九四六・四）と断言して憚らない。しかし、こうした安易な自己の普遍化によつては、天皇制という構造的基盤を解体する実践的な運動組織を形成することはできない。竹内は、『近代文学』派の戦略を継承しつつ

も、その実践における方法論を、単相的な自我確立から、自我を伴った国民の連帯＝組織化へと転換させようとするのである。この組織化された国民の力こそが、天皇制を穿つ唯一の力なのである。

だが、組織論としての国民文学論は、竹内のオリジナルな発想ではない。既に竹内に先立って、一九三〇年代における議論の延長線上に組織論としての国民文学論を展開していたのはタカクラ・テルである。タカクラは、「新しい文学わ、大衆的であると同時に、また、それがために、勤労者からだの底にかくれている、生産的な美しい感情や感覚おひきだし、いっそー、これを高め、じゅんすいにして、人生や社会や歴史へのゆるがない確信と喜びお全勤労者に植えつける要素お持たなければならぬ」(「人民に仕える文学」『人民文学』一九五〇・十二)と述べている。これは一読して明らかのように、青野季吉＝レーニンの組織論である。では、竹内の組織論と、既存の組織論とはどう違うのか。

青野が、レーニンの『何をなすべきか』<sup>④</sup>を援用して目的意識論としての組織論を展開したことはよく知られている。青野は、次のように述べていた。

私は、レーニンが説いてあるやうに、プロレタリアの自然生長には、一定の局限があると信じてゐる。プロレタリアの不満や、憤怒や、憎悪は、そのまゝで放置されては、決して充分に批評され、整理され、組織されるものではない。即ち社会主義的目的意識は、外部からのみ注入されるものであると信ずる。我々のプロレタリア文学運動は、文学の分野での、その目的意識の注入運動であると私は信ずるのである。

(「自然生長と目的意識再論」『文芸戦線』一九二七・一)

ここで青野が述べているのは、自然発生的な共働関係を、前衛が事後的に収奪してゆくということである。組織を国民という全体の底から立ち

上げようとする竹内の国民文学論が批判するのは、こうした既存の組織論における暴力性であった。竹内は、次のように述べている。

近代市民の尖端だけをとりえて、それで全体を包括するのは、たしかにまちがつている。それは実際的でない。近代市民を出発点にして革命のコースをえがくことはできない。伝統の影をもつた庶民の、うしろ向きの暗さの底にかいくぐつて、そこからエネルギーを引き出すのでなければ、革命は成らないだろう。(中略) 民衆は、すでに存在し、それを利用すればいいという性質のものではない。天くだりのいわゆる「大衆路線」の考え方はまちがつている。民衆は不断に形成すべきものであつて、それを形成するものは、ほかならぬ民衆自身である。

(「日本の民衆」『現代史講座第3巻』創文社 一九五三)

そして、小田切の国民文学論も、竹内と同様に既存の組織論を批判するものであった。小田切は、過去の組織論が「天皇制絶対主義の抑圧によつて苦悩していたすべての人民諸階級・層の、おのがじしの民主的自由への要求や文学的要求にプロレタリア文学が固く結びついてゆくことを困難にした」(「国民文学論の到達点と問題点」前掲) 点を強く批判し、「社会主義リアリズムの優位性」を国民文学に押しつけるのは愚かなことである」(「現代の人間と国民文学の人間像」『群像』一九五三・十)と、神山彰一などが主張した、国民文学論における安易な社会主義リアリズムの反復を牽制する。

竹内・小田切は、既存の組織論における上意下達の暴力性を批判する。彼らによれば、この暴力こそが、天皇制に他ならないのである。竹内は、「プロレタリア文学運動の組織形態そのものが天皇制の投影であり、天皇という隠された象徴が日本共産党の神秘的本体と等価である」(「プロレタリア文学Ⅱ」『岩波講座日本文学史第十三巻』岩波書店 一九五九)と述

べている。ゆえに、天皇制を穿つためには、自己に内面化されたそれを穿つと同時に、革命運動の組織に内在化された天皇制を穿たなければならないのだ。

しかし、このような論理機制には、まだ解決されない問題が残っている。戦後国民文学論が展開する組織論には、致命的な外部が存在するのである。例えば、それは、中野重治の次のような表現だ。

仮りに天皇、皇族が心からあやまつて来た場合、報復観念から苛酷に扱はうとするものが仮りに出て、つまりもし天皇を臣としようとするやうなものがあれば——国民の臣であれ——それとたたかふことこそ正しいのだ。皇族だらうが何だらうが、そもそも国に臣なるものがあつてはならぬ。彼らを、一人前の国民にまで引きあげること、それが実行せねばならぬこの問題についての道徳樹立だらうではないか。

〔「五勺の酒」『展望』一九四七・一〕

中野はここで、天皇が国民の一人に他ならないことを強調し、そして、「恥づべき天皇制の頽廢から天皇を革命的に解放すること、そのことなしにどこに半封建制からの国民の革命的解放があるだらう」とも書いている。つまり、天皇は、国民文学論が組織化すべき一員であるということだ。だが、戦後国民文学論において、天皇を含めた国民の組織化を提議した者は、竹内・小田切は元より皆無であった。国民文学論は、天皇を天皇制と共に穿つべき対象として疎外し続ける。国民文学論が前景化する民衆と等しく、解放された表現を手にすべき主体として天皇を捉えることがなかったのである。

一方、中野は、「五勺の酒」の中で、天皇を余りにも愚直な存在として描き出していた。例えば、千葉へ行幸に赴いた模様を撮ったニュース映画の一場面を次のように記している。

そこで甲高いはや口で「家は焼けなかつたの」、「教科書はあるの」と、返事と無関係でつきつきに始めて行つた。訊かれた女学生は、それも一年生か二年生で、ハンケチで目をおさへたまま返事できるどころでない。そこでついてゐる教師が——また具合よく必ずゐるのだ——肘でつついて何か耳打ちをするが、肝腎の天皇はその時は反対側で「家は焼けなかつたの」、「教科書はあるの」とやつてゐるのだからトンチンカンな場面になる。さうして、帽子を冠つたと思へばとり、冠つたと思へばとり、しかしどうすることが出来よう。移動する天皇は一步ごとに挨拶すべき相手を見だすのだ。さうして、冠つてはとり冠つてはとりして建物のなかへはいつて行つた。

ここで重要なのは、中野が、天皇の愚直さと共に、女学生の愚直さを同時に描いていることである。天皇の仕草は「笑止千万」だが、天皇はそうするより他はない。「さうするのが本人に気がらくなのだ」と語り手の校長は述べている。また、「女学生が泣いて万歳をいふのは天皇を神としてあがめる方向へ看客を導くものだ」と、このニュース映画の撮影に激しく反撥する彼の生徒に対して、校長は、「どこが制作が反動的だ。彼らの妹、彼らの恋人、彼らの未来の妻たるあの女学生たちに泣く以外何が可能だつたらう」と言う。天皇も女学生も、身体を自動化するほどに浸潤した往時の記憶、行動様式から全く解放されていないのだ。

おそらくこのような光景は、日本全国で見られたものであるだろう。一九四六年から一九五四年にかけて、天皇の地方巡幸が行われており、天皇は、沖繩を除く四六都道府県に出向いている。<sup>6</sup> 原武史によれば、この巡幸は、近代日本を貫徹し戦中戦後を連続する、「天皇を主体とする視覚的支配」〔『可視化された帝国』みすず書房 二〇〇一）を、象徴天皇制下で強化するために実施された戦略であった。だが、原が注意深く記しているように、この支配形態は一方的な作為ではなく、天皇制の「存

続を求める圧倒的な国民感情」なしには実現し得ないものであった。ゆえに、ここには、竹内が言う「天皇制機構の本質的な虚偽性」（「権力と芸術」『講座現代芸術Ⅴ』勁草書房 一九五八）という評価では割り切れないものがあるはずだ。例えばそれは、「五勺の酒」の校長が抱える両義性である。

語り手の校長は、先のニュース映画を見て、「僕は改めて、言葉はわるいか知れぬがこの人を好きになつた。少くとも今まで以上好きになれる気がした」と言い、天皇の滑稽な立ち振る舞いを見ている内に、「歯がゆさ、保護したいといふ気持ち僕をとらへた。もういい、もういい。手を振つて止めさして、僕は人目から隠してしまひたかつた」と思う。語り手の校長にとって、天皇は既に自己の身体の一部なのであり、映像の中で耐えがたい恥辱に晒されているのは、天皇であり且つ校長自身でもあるのだ。つまり、天皇個人の姿は、それに投射される自己意識そのものでもあるということだ。天皇制廃止論者である校長が持つこうした両義的な感情を、国民文学論は捉えることができなかつたのである。竹内や小田切は、自らを天皇・天皇制から分離・独立した主体として位置付ける。天皇個人の存在を思考の通路に含むことができなかつた国民文学論が看過したのは、この特権化された自己意識であつた。

竹内は、「五勺の酒」について、「意あまつて力足りていない」（「権力と芸術」前掲）と批判し、代わりに野間宏の『真空地帯』（河出書房 一九五二）を高く評価していた。これは、皮膚感覚として普遍的な天皇制的精神構造が『真空地帯』で表現されていることを称挙するものである。けれども、竹内から中野への批判は、そのまま竹内へと返されるだろう。竹内の天皇制批判及びその具体化である国民文学論もまた、意余つて力足りていなかったのではないか。さらに言えば、天皇を疎外し続ける国民文学論の言葉そのものが「俗情との結託」（大西巨人「俗情との結託」

『新日本文学』一九五二・十）ではなかつたか。

竹内は「精神構造としての天皇制」（「権力と芸術」前掲）を強調し、一方小田切は「天皇制絶対主義」（「国民文学論の到達点と問題点」前掲）という言葉で政治機構論的に天皇制を捉えている。しかし、メンタリティーとして、あるいは制度として天皇制を把握することは、いずれにせよ天皇との関係を垂直的に認識することであり、それらが結果するのは共に、天皇及び天皇制に対峙し得る強固な近代的自我の確立であるはずだ。国民文学論から自我確立の契機を排する野間宏の主張（「国民文学について」『日本文学』一九五二・九）<sup>①</sup>に対して応答した二人の論（竹内「文学の自律性など」『群像』一九五二・十一、小田切「日本が待つてゐる言葉を」『新日本文学』一九五三・一）は、国民文学論における自我確立を、中心課題として決して手放さない。近代化論・天皇制批判としての国民文学論において、これは論の要諦であつたからである。だが、鶴見俊輔が言うように、「近代化」の必要を説くについても、ぼくらが近代化されているかのよう考へて、日本の庶民の近代化をサトシテいるのは、ぼくらの思想が天皇制官僚としての言語的刻印をうけていることをしめし、かえつて、ぼくらにある形での天皇制依存の状態のあかしとなつている」（「日本思想の特色と天皇制」『思想』一九五二・六）ことであるだろう。即ち、国民文学論も、内面化された言語的刻印としての天皇制から離脱できてはいないので。

ところで、天皇制を精神構造や政治機構として捉えるのではなく、言葉として捉えるという国民文学論が到達できなかったこの認識を提示するのもまた、「五勺の酒」（前掲）であつた。この小説は、天皇制批判と表裏一体である共産党批判が主題の一つになっているが、憲法特配の酒を飲みくたを巻く語り手が執拗に批判するのは、共産主義者・『アカハタ』及びそのエピソードが用いる言葉である。語り手である校長は、

天孫降臨種族は高天原へ帰れと書いた『アカハタ』記事を批判し、どこに天孫降臨種族が存在し、どこに高天原があるのかと教え子に諭す。生徒たちは、天皇制擁護とも受け取れるこの発言に激しく反撥するが、彼らの言葉を聞いてる内に語り手は、「要するに彼らは、天孫だの高天原だのをやつつけるのが楽しいのだ。そして実地にはその現実の力を忘れることで満足してゐるのだ。筆者がまたそこへ導いてゐるのだ」ということを理解する。そして、こうした空疎な言葉が反復してゆく中で、天皇制が延命されると語り手は考えるのだ。「天孫人種は高天原に行つてしまへ。それは頹廢だ。天皇制廢止の逆転だと思ふがどうだらうか。『アカハタ』がそれだから、中学生などがいい気になつてふふんと鼻であしらひ、その実いつまでも、せいぜい民主的天皇に引きずられて仰ぐものとして心で仰ぐことになるのだ」と述べる語り手は、言葉によつて再生産されるものこそが天皇制に他ならないということに気付いている。つまり、中野は、天皇制を言葉そのものとして表現しているのである。<sup>⑧</sup>

戦後の国民文学論は、中野が「五勺の酒」で描出したような天皇個人への想像力を持ち得ず、天皇制の核心を見損なつていたものだった。竹内や小田切は、自身に内在する言葉を自己言及的に批判し尽くすことができなかつたのである。そして、以上の考察を経た上で、再度、本稿が冒頭に引用した中野の「かなしい遺産」を想起すれば、それは、戦後国民文学論に対する痛烈な批判として捉え直すことができる。戦後国民文学論が批判できなかつたのは、自らに内面化された言葉としての天皇制であつたのだ。竹内と小田切は、戦時下のプロレタリア文学運動や国民文学論を批判し、それらとの差異化を試みようとしたが、しかし、言葉として在る天皇制の連続性を切断することができなかつたのである。

戦中戦後と連続する抑圧は、軍隊や警察といったものに具現する力に

よつてのみ駆動するのではない。中野が述べていたように、人は、慣習的に使用する言葉によつても拘束されているのである。ゆえに、抑圧からの脱出、即ち革命を遂行するために必要なのは、プロレタリア文学運動が目標とした国家権力の奪取や、国民文学論が目的とした近代化などではなく、不断に継続される表現の更新と、絶え間なく発せられる言葉の畳重なのである。

#### 注

- ① 伏せ字の復元は、「日本における情勢と日本共産党の任務についてのテーゼ」(『コミンテルン資料集第五卷』大月書店 一九八二)を参照した。
- ② スターリン「マルクス主義と民族問題」(『スターリン プハーリン著作集第十四卷』スターリンプハーリン著作集刊行会 一九二八)を参照。なお、スターリンの民族論は、戦後の国民文学論でも大きな影響力を持った。蔵原惟人「芸術における階級性と国民性」(『新日本文学』一九五二・六)、水野明善「国民の名によつて自覚するもの」(『新日本文学』一九五二・十一)を参照。
- ③ 系譜探しとしての国民文学論は、戦後においても何の歴史的省察もなく反復されている。例えば、白井吉見は、「日本には過去において国民文学と呼べるものがあつたかどうかということが問題になるが、むしろあつたに相違なく、和歌俳句はまさにこれであつた。(中略)和歌俳句のほかに、近代文学としての国民文学はなかつたかといえば、ほくはあつたと思う。大正期の半ばにいわゆる純文学と通俗大衆文学とに分裂する以前には、近代文学としての国民文学というべきものがあつた、少くともそのイメージとしてあてはめることのできるものがあつたのではないか。具体的にいえば、紅葉なり、蘆花なり、独歩なり、藤村なり、漱石なりの小説は、国民文学といつてさしつかえないものであつたと思う」(「うなぎあ・こっく 国民文学」『群像』一九五二・七)と述べている。
- ④ レーニンの「何をなすべきか」は、その一部が「理論的闘争の意義」(『マルクス主義』一九二五・八)、及び「大衆の自然生長性と社会民主主義の目的意識性」(『マルクス主義』一九二五・九)として訳出されてお

り、平野謙によれば、これが邦訳の初出である。平野謙「解説」(『日本プロレタリア文学大系』三一書房 一九五四)を参照。

- ⑤ 主に『人民文学』に拠る文学者たちの中で、国民文学論は、往時の社会主義リアリズム論が発展したものとして考えられた。例えば、神山彰一は次のように述べている。『社会主義リアリズム』が、世界プロレタリアートの共通の武器となつていることに対する、確信ある論証は、日本の現状の中で、とくに必要なものといわなければならない。それは日本文学における創作実践上の国際的連帯を高める環であると同時に、日本文学自体の創造性を高める軸である。この創作方法は、プロレタリアートの誕生の中にその発祥をもち、その成長とともに内容<sup>ていぶ</sup>づけられ、そしていまや、プロレタリアートの存在するところ、すべて共通の意義をもつ、創作実践上の支柱である。このことが強調され、それが労働者作家の中に定着し、創作実践上の確信に高められることが、いまもつとも重要なのが、日本文学の現状であろう」(『民族解放の国民文学』『理論』一九五二・八)。
- ⑥ 坂本孝治郎「昭和期の天皇行幸の変遷」(『学習院大学法学部研究年報』一九八九・三)を参照。

⑦ 野間<sup>ノノ</sup>は次のように述べている。「私たちは封建制とのたたかいを、明治以来の日本の近代文学がはたしたやり方、自我確立の方向においてはたそうとするのではない。私たちは明治の近代文学の最初の出発である二葉亭四迷、北村透谷に於てすでにみられる欠陥、例えば文学世界と現実世界とのかい離、そして文学的<sup>ぶんがくてき</sup>な自我の封建制とのたたかいといつても、それは文学世界内のたたかいであり、その文学的<sup>ぶんがくてき</sup>自我が現実のなかで自我として確立されたのではないという欠陥をのりこえることをめざしているのである」(『国民文学について』『人民文学』一九五二・九)。

⑧ 「五勺の酒」に関する先行研究の中でも、林淑美「(奉戴)という再生産システムをめぐって」(『昭和イデオロギー』平凡社 二〇〇五)は、作品分析に、(イデオロギーの再生産)の観点を導入した点で画期的な論考であった。本稿はこの成果を敷衍し、「五勺の酒」が、アルチュセールの言う「国家のイデオロギー諸装置」(『再生産について』平凡社 二〇〇五)のみならず、イデオロギーの基礎となる物質的存在としての言葉そのものをも相対化する表現を内包していると考ええる。なお、言語の物質性に関しては、マルクス・エンゲルス『新編輯版ドイツ・イデオロギ―』(岩波文庫 二〇〇二)を参照。

〔付記〕

資料の引用において、漢字は全て新字に改めた。また、引用・参考資料名の副題は省略した。

(本学大学院博士後期課程)